

# 形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相 ——「ク活用 2 音節対義形容詞の形態的対応」を添えて——

安 部 清 哉

## 0 はじめに

語彙研究において、この 20 年ほどの間、その理論的研究の遅れが指摘され続けてきた。

また、個々の研究——例えば、語史的研究、語誌的研究、意味分野を限定した語彙史的研究、あるいは、一資料の中での語彙的研究など——の成果を、どのようにして、つまり、どのような理論的枠組みに基づいて、総合的に位置付け、語彙史全体を把握していくか、ということが、長く課題とされて続けてきている。音韻や文法の研究とはまた別に、語彙研究として、「語彙の体系」をどのように仮設し、構築していくのか、ということも、その課題の 1 つであった。

これらの研究史上の課題や理論的問題については、執筆者も、近時の安部 2009.11a・b、安部 2010.3 で具体的に取り上げ論じてみた。

その行論の過程で明らかにできたことは、一つには、語彙研究の中での、研究分野（ジャンル）の整備と体系化の必要性であり、それらの研究者間における共通理解の確立の必要性である。いま一つは、それら個々の研究ジャンルの中において、従来から、体系的、構造的な語彙の特徴を示している研究として、一定の評価のある典型的な語彙（史）研究を改めて確認

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

し、それらに共通した研究上の特徴を再検討した上で、そのような語彙（史）研究における理想的条件を備えた研究を、積み上げていくことの必要性である。

本稿では、これらの課題について論じ、また、さらにそのうちの一つの課題である部分的体系の事例として「形態と意味との対応関係」をもつ具体的例を取り上げて考察してみたい。（前半の理論的部分は、安部 2009.11a・b、安部 2010.3 に続く内容である。）

具体的には、次の諸点について取上げる。

- 1 「学界展望」（語彙分野）から見た語彙研究の課題
- 2 語彙の構造的・体系的研究に認められる共通特徴
- 3 ミクロな語彙の体系とマクロな語彙の体系のとらえ方
- 4 部分語彙と各研究分野の理論的再構成について（安部 2009 において、「語彙的カテゴリー」と位置付けたもの下位構造の検討）
- 5 語彙の構造的特性に関する具体的事例研究（特に、形態と意味との対応関係について）

以下、まずは、上記の研究史的課題を確認する意味を込めて、学会誌における最新の「学界展望」で語彙研究の状況を把握しておきたい。

## 1 語彙研究の諸分野の独自性は、どのようにとらえられているか ——「学界展望」から見える課題

### 1-1 語彙研究の特有分野

音韻・文法・文体などの他分野に比べて、「語彙」研究における特有のテーマやジャンルは、十分に把握されているだろうか。あるいはまた、それらに関して、語彙研究者の中では、一定の共通した理解を得ているものがどれくらいあるであろうか。

いま、参考まで、日本語研究の最高水準を誇る日本語学会の機関誌『日本語の研究』における「学界展望」の最新版によって、その問題を見てみることにしよう。取り上げるのは、2年に一度行われる学界展望の最新号

である、2010年7月刊行の『日本語の研究』「学界展望号」7巻1号である。その中でも、史的研究において蓄積のある4分野——音韻・文法・文体と語彙（それぞれの「理論・現代」と「史的研究」）——を取上げ、前者3分野と語彙を比較し、それぞれの研究ジャンルの分類や取上げられ方を、主に章の見出しを材料として、比較検討してみることにしたい。

なお、学界展望の各担当原稿およびその章毎の見出しが、必ずしもそのジャンルに特徴的なテーマでまとめられるとは限らず、その期間の単に流行を示したり、テーマというより資料や出版形態（研究書、雑誌論文）などで分類されることはあるが、以下に示すように、各分野の一定の傾向を把握することはできる。

まず最初に、(1) 音韻・(2) 文法・(3) 文体別に、それぞれ「理論・現代」「史的研究」における章の見出しを羅列してみる。各分野におけるある程度特徴的研究テーマないし研究ジャンルと言えるであろうものに下線を付してみた。時代別、出版形態、専門領域別を示している場合（例えば、「音韻（理論・現代）」の「言語教育、日本語教育、国語教育」）もあるが、下線部のように、よく知られたその分野特有の、いわばキーワード的術語が提示されていることがうかがえる。それらを見ただけでも、どの分野のテーマであるかが明確にわかるものとなっている。後掲の(4) 語彙と比較してみていただきたい。

#### (1) 音韻

##### 音韻（史的研究）

- 1 文献以前の日本語
- 2 字余り・唱詠
- 3 分節音
- 4 和語のアクセント
- 5 漢字音（漢語アクセントを含む）
- 6 研究史

##### 音韻（理論・現代）

- 1 はじめに /
- 2 総合的なもの
- 2.1 概説書
- 2.2 事典
- 2.3 翻訳書
- 2.4 論文集
- 2.5 特集 /
- 3 分節音
- 4 韻律
- 5 バラ言語・非言語音声
- 6 言語獲得
- 7 構音障害
- 8 方言

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

9 言語教育 9.1 日本語教育 9.2 国語教育 / 10 おわりに

## (2) 文法

文法（史的研究）

- 1 概況 2 テンス・アスペクト 3 モダリティ 4 動詞と格
- 5 その他助動詞 6 いわゆる代名詞（指示詞・人称詞）
- 7 敬語・待遇表現 8 その他

文法（理論・現代）

- 1 文法書、論文集等の出版状況 2 文法研究の立場
- 3 叙述類型論、事象意味論、形容詞論
- 4 格（体制）、他動詞分、ヴォイス 5 副詞、数量詞
- 6 アスペクト、テンス、モダリティ、主観化
- 7 主題（提語）、とりたて 8 複文、連体修飾節
- 9 コンピュータ文、敬語、発話行為、発話機能、談話
- 10 日本語教育と文法研究 11 言語資料と文法研究

## (3) 文章・文体

文章・文体（史的研究）

- 1 文章に関する研究 2 文体に関する研究 3 表現に関する研究

文章・文体（理論・現代）

- 0 はじめに / 1 接続詞、指示詞など文章・談話の結束性に関わるテーマ
- 2 文章・談話の一貫性、文章・談話の構成と展開に関わるテーマ
- 3 文法的な言語形式の談話機能に関わるテーマ
- 4 予測・推量・視点・理解の心的過程など認知に関わるテーマ
- 5 文章や談話における相互行為に関わるテーマ
- 6 レトリック・文体・スタイルシフト・表現に関わるテーマ
- 7 おわりに

## (4) 語彙

語彙（史的研究）

- I 学会の動向 II 著書・事典 III 論文

- 1 総論・体系的研究 2 語構成に関する論考
- 3 漢語の受容・訓点語・記録語に関する論考
- 4 個別の語史・語誌に関する論考
- 5 領域を限定した語彙の意味・用法に関する論考

語彙（理論・現代）

- 0 はじめに 1 語形成 2 命名 3 動詞・形容詞 4 語の意味
- 5 多義語（多義性） 6 類義語 7 おわりに

語彙の2つの「学界展望」の見出しを（4）に挙げた。下線部の「語構成」「漢語」「訓点語・記録語」（史的研究）、「語形成」「命名」「意味」「多義語」「類義語」（理論・現代）という語彙特有の術語も見られる。しかし、各章の見出しとしては、主要な内容の一部の術語のみであろうとは言え、これらが語彙研究の主要な分野であるということなのか、これらしか取上げられたテーマはなかったのか、漢語以外の語種や、形態、計量的研究、位相、文体に関わる研究はなかったのか。語彙特有の分類として妥当なものか（例えば、「語形成」よりも上位概念と思われる「語構成」の方がよりふさわしくはなかったか、また、意味、多義、類義は要するにみな「意味」の研究であり、「動詞・形容詞」は文法の研究と変わらない分類名である）など、いろいろ気になる点が浮かび上がってくる。

特に、文法や音韻では、この期間における当該分野の主要テーマを、特徴的に網羅的に概観し得るように見える構成になっている。一方の語彙では、それらに比して部分的に偏り、また、あまり独自の広がりがない分野であるかのようにさえ見えてくる。しかし、それは、それらの展望論中で紹介されている論文の量と質から見ても、この2年の期間の研究が多様性がなく活発でなかったため、というよりも、やはり、当該分野における研究の理論的整備の遅れや研究体系とその把握の重要性が、語彙研究の世界全体に必ずしも共有されていないことを、投影しているものと考えざるを得ない。そのことは、次のことから間接的に裏付けられる。

## 1-2 「語彙」の理論的研究課題（「学界展望」7巻1号）

次に、その展望号における「理論・現代」と「史的研究」との2つの展望論文における全体的評価に関する記述を比較してみたい。

まず、「語彙（史的研究）」（吉田光浩氏担当）には、次のように当該時期を論評している。

「本誌 2006・2007 年の展望号では、全般的な動向として『（略、引用者要約＝理論・総論・語彙史・体系的研究が少ない、その一方、個別の語史・特定資料の語彙研究が多く、対象を限定したものに偏る傾向）』と把握する記述が見える。今期も総体的にはその流れのなかにあると言ってよいが、体系的・理論的研究が現れがたい理由は、研究の進展に伴い個別の資料が語りかける細部を視野にいれた取り組みが必要になってきているからであろう。そのため、全体を俯瞰する視野を持つ総論的・体系的な研究は、これまで以上にまとめるようになっていくようである。」（下線引用者、以下同じ）

細部の課題を視野に入れることに気が取られて、体系的理論的研究が後回しになっているとすれば問題である。「木を見て森をみず」でも「森を見て木を見ず」でもなく、それら両方の視点が必要であろう。なお、次のように、「体系的な研究」がなお課題であることも改めて強調されている。

「しかし、広範にわたる言語資料の多様性を包括するに足る具体的な語彙研究・語史研究の方法論が存在しない現状においては、体系的な研究への志向を放棄すべきではなく、論証の客観性を保ちながら地に足のついた営為を積み重ねることで、やがて見えてくるものがあると思う。」

一方、「語彙（理論・現代）」には、「理論」への展望も、前期からの通時的比較を展望する記述も、全体的論評としては見られないようである。「（理論・現代）」の部門こそが、まさに語彙研究の理論上の進展を跡付け、その課題を論ずべきところと期待される。これは担当者個人の問題ではな

く、語彙研究において、課題自体がまだ共有されていないことを投影している。ここに、語彙研究の、もう一方での現状と課題が象徴されているように。

これらからもわかるように、また、安部 2009.11a でも強調したように、理論的な共通する課題を明確にし、共有していくことがなお必要である。また、語彙の研究に特有のその研究領域とその分類や名称についても、もっと活発な議論が必要であろう（安部 2009.11a、安部 2010.3 参照）。

このように考えた場合、今後の課題として、次のような問題を検討していく必要があることがわかる。

課題 1 語彙研究に特有で特徴的側面を、文法、音韻等とは別に、どのように把握し設定するか。（安部 2009.3 の「語彙的カテゴリー」および 4-3 参照）

一方、これらのような、まだ統一的展望が見出せていない課題とは別に、一定の共通理解を得つつある概念も徐々に積み上げられてきている。それは「語彙の体系」へのアプローチである。次にそれを少し見ておくことにしたい。

## 2 「語彙の体系」における「形態と意味との対応構造」

——田島 1999 と秋元 2002 を通して——

### 2-1 「形態と意味との対応関係」田島毓堂 1999

語彙における「体系」を、音韻や文法とはまた別にどのように考えていくか、という問題も長い間課題とされてきた。その点に関して、田島毓堂 1999 では、次のように 1 つの方向性を提示している。

「語彙の体系という以上、少なくとも語形と意味との対応を伴ったタテ・ヨコの緊張関係というものが必要だと思います。」田島毓堂 (1999)『比較語彙研究序説』p. 42

そこで述べられている「語形と意味との対応」、「タテ・ヨコの緊張関係」という内容が意味している概念が、具体的にはどのようなイメージを

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

表しているかは、そこで提示されている事例で具体的に理解することができる。田島は、その事例として、部分的なものと断りながら次のようなものを挙げる（具体的説明や図は略す）。

数詞の体系、色彩名称の体系、親族名称と男女を表す語（語彙）、コソアド体系、人称代名詞、擬声語・擬態語（オノマトペ）

これらは、語彙研究の入門書や概説書などでもよく取上げられているものであり、語彙研究者であるなら、この項目名を挙げただけで、田島氏の示したイメージを理解することができるであろう。それだけ一般的に語彙の体系を示す研究例として、受け入れられてきた事象である。興味深いのは、それらとほぼ同様の事例が、次に見るように、日本語教育の語彙の概説書である秋元美晴 2002 でも、踏襲されて拡大的に挙げられている点である。

## 2-2 「語彙体系の具体例」秋元美晴 2002『よくわかる語彙』

秋元美晴 2002『よくわかる語彙』は、田中章夫（1978 国立国語研究所（1984・1985、玉村文郎執筆担当）を主に参考にして、日本語教育用の概説書として編まれたものであるが、むしろそれゆえに、当時の語彙研究の、最大公約数的共通イメージが全体的にわかりやすく切り取られている。その点で、研究史的にも現段階での水準を確認するのに便利である。その中に「語彙体系の具体例」という項目があるのが、田島 1999 との比較上目を引く。語彙研究書では、そのようなタイトルで断定的にはなかなか挙げにくい問題を、概説書ゆえにむしろ大胆に切り取って提示している。

その「第1章 語彙の体系」の「1 語彙に体系はあるか 2 語彙体系の具体例」のうち、第2節「語彙体系の具体例」（p. 19）には偶然にも田島 1999 とほぼ同様の事例が、次のように挙げられている。

親族語彙の体系、色彩語彙の体系、コソアド体系、温度形容詞の段階的關係、意味の階層的關係（上位語・同位語・下位語）、オノマトペ（章末の基本問題に掲載）、類義語と意味場（衣服着脱語彙、人称名

詞）等。（図は略す）

これらは、いわゆる「小さな体系」とも言われるものであるが、それでも、現時点で「語彙の体系」として、ほぼ共通して広く認知されているもの、と言えるのではないだろうか。

それらの多くには、一部に該当しないものがあるが（例えば、林大の「星座になぞらえた語彙表」、田島氏が指摘したと同様の「意味と形態との関係」が認められる。田島1999でも、語彙研究を概観している秋元2002でも、共通して認められる理解としては、現在、次のような特徴を持つ場合は、体系性を備えた語彙と見なす、ということを示していると思われる。

「語彙の体系」の典型的特徴の一つ——「語形と意味との対応を伴ったタテ・ヨコの緊張関係」

また、秋元氏は、次のようにもまとめている。

「ある程度語彙の範囲を限定して考えれば、語彙にも体系はあるといえよう。」 p. 18

「形の面からは～～語構成を基に語彙の体系に迫ることもできる。また、語の音節数や語の出自【安部注：形態や語種と言えるもの】からも体系化できる。意味の面からいえば、～～体系性を考えることは可能である。どの面から語彙を考えるとしても、語彙の中核となる基本的な部分ほど体系性は明瞭であり、周縁的な部分ほど体系性は曖昧になる。」 p. 18～19（事例の前部分）

これら下線部のような語彙への理解は、多くの研究者と共有されているものと思われる。（ただし、「体系」の定義については、「体系とは要素同士が何らかの相互関係によって結ばれている集合である。」と述べる程度に留め、「意味と形態相互の」あるいは「意味」ないし「形態」に関わるような限定はしていない。「意味と形態相互の対応関係」を最も狭義の解釈とすれば、この秋元氏のような把握は、もっとも広義の一般的な理解と思われる。）

形態と意味は、共に語彙研究の基礎的分野であり、この2つは、共に、他の語彙的分野——語構成・語種・文法範疇・位相・文体・文字・文化ほかの語彙的カテゴリー（安部 2009.11 参照）——においても、関わっている側面である。それゆえ、「形態と意味との対応関係」を見ることは、意味・形態以外の語彙的カテゴリーそれぞれにおける「語形と意味との対応関係」を解明していくことに含まれてくる、と解釈される。

また、「形態と意味の相方に関わる対応関係」という制約の強いとらえ方以外にも、「意味に見られる構造的特性」や「形態に見られる構造的特性」のように、各々の側面毎の構造や規則性というものも、広い意味でのある種の体系的なものととらえていく方が、言語の特性をとらえていく上では、有効なのではないか、と思われる。

そのようにとらえることができるなら、田島 1999 や秋元 2002 における、「語彙の体系」に対する共通理解から見えてくるものとしては、次のことが言えるのではなからうか。

○形態、意味、語構成、語種など、語彙に特有で特徴的側面のそれぞれにおいて、その中核的基本的部分に見られる、「何らかの相互関係」「規則性・構造的性・階層性」、特に意味・形態に関わる面としては「形態と意味との間に形作られる対応関係」を明らかにすることが、当面の「語彙の体系」の研究目標である。

仮にそのように考えた場合、次の段階の課題としては、以下のような問題を検討していくことが必要と思われる。（計量的研究における“体系”のとらえ方についてはまた別に位置付けられよう。）

課題2 語彙における「何らかの相互関係」「規則性・構造的性・階層性」の具体的例としては、従来の研究からはどのようなものを挙げることができるか。また、今後新たにどのようなものを提示していくことができるか。

### 3 ミクロな語彙の体系からマクロな語彙の体系まで

#### ——語彙的体系の“階層性”と“併存性”

——ミクロの語彙＝小さな語彙、および、マクロな語彙＝語彙全体、そして、それらの間をつなぐのは、「語彙的カテゴリー」の階層的体系的構成と各カテゴリー内における特有構造である——

語彙の体系のとらえ方について、語彙全体を統一体としてとらえるマクロな体系と、個々の要素相互の関係性に重点を置いてとらえるミクロな体系という2面的とらえ方ができる、としたのは、宮島達夫1977であった。その考え方を敷衍し、安部2009.3では、宮島氏の「語彙的カテゴリー」「中間的カテゴリー」という概念を参考に再解釈して組み替え、マクロな体系とミクロな体系の間に、語彙の切り取り方のレベル（語彙的カテゴリーの質的段階的相違）によって、いくつもの「中間的カテゴリー」と、それぞれの範疇における「部分的語彙体系」とでも言えるようなものがある、と考えてみた。そして、その考え方に基づき「語彙的カテゴリー」とその構造を仮構成してみた。

そのような、言わば「語彙的カテゴリー」の中の段階性階層性を考えてみたのは、語彙を設定する諸概念でもあるところの「語彙的カテゴリー」（安部2009.11a）それ自体が、異なった規模と単位構成によって、語彙を切り取っているからでもあった。別の言い方言えば、「語彙的カテゴリー」それぞれの内部構造が異なることに応じて、その内部の部分語彙（体系）の階層性段階性が生まれてくる、という考えでもあった。

また、語彙的カテゴリー毎に、それぞれでの全体的体系や部分体系というものが考えられるから、体系自体も語彙をとらえる側面毎に、併列的に存在することになると考えられる。

#### 1 語彙的体系の階層性＝「マクロな体系——中間的な体系——ミ

### クロな体系」

- 2 語彙的体系の併存性＝「語彙的カテゴリー＊」それぞれにおける体系。（＊意味、形態、語種、語構成、文法機能、文字、位相、文体、文化、計量的分析方法、意味体系的分析方法（まとめりとしての意味的分類・シソーラス研究）＝安部 2010.3）

なお、宮島 1977 の冒頭部分の記述を以下に引用する。本節での解説（解釈）との関連がわかるように小見出しを《 》にて付しておく。

◆ 「マクロな体系」「ミクロな体系」——宮島 1977 「語彙の体系」『講座日本語語彙』岩波書店

「日本でも泉井久之助が「語彙は常に各要素が張り合つてゐる統一体である。」とのべたのは、一九三五年のことだった。

《「大きな体系」と「小さな体系」》では、語彙をどのようなものとしてとらえることが体系的な見方といえるだろうか。体系とは各部分が有機的にむすびついて一つの全体をつくっているものである。泉井の表現にしたがえば、各要素がはりあっている統一体である。この、全体、統一体という面を強調するか、有機的なむすびつき、はりあいという面に重点をおくかによって、語彙体系のとらえかたにも二つの型が生ずる。これらをそれぞれ大きな（マクロな）体系とちいさな（ミクロな）体系、というふうによびわけることにしよう。

語彙を大きな体系としてとらえる、という論点からは、日本語の語彙全体をみわたしたうえでみえてくるのが問題となる。たとえば、基本語彙やいわゆる位相論などはそれである。外来語や漢語にしても、ある単語が何語からはいったか、というようなことのコまかい考証よりは全体としての漢語、外来語が現在の日本語のなかではたしている役割りがとりあげられる。このような問題は一つ一つの単語の研究からしぜんにでてくるものではなく、それと直接的には関係しない。日本語の単語が全体として一つの統一体をなし、そのかかえている問題点が要素としての単語から相対的にきりはなせることを認識したときに、はじめてうかがあがってくるものである。

語彙をちいさな体系としてとらえることは、単語をひとつひとつ完全に独立のものとしてではなく、ほかの単語と密接に関係し、はりあっているものとしてとらえることである。「ドレス」「ベルト」といった単語の意味を、それだけきりはなして記述するのではなく、「きもの」「服」「帯」などの単語とはりあい、制約しあうものとしてみとめるとき、それはこれらの単語のかたちづくるちいさな体系をみとめたことである。このような意味での体系的なとらえかたは、いちいち

の単語の記述に直接むすびつき、これを精密にするものにほかならない。（中略）  
《「語彙的カテゴリー」「いくつもの中間的カテゴリー」ある種の語彙的カテゴリーは語彙全体をいくつかのグループにわけるとにすぎない。たとえば語種、すなわち単語の出身の観点からは、和語、漢語、外来語の大きな三つのグループのなかをさらにわけるとはむずかしく、せいぜい英語から、ドイツ語から、オランダ語からなどと国別にわけることができる程度である。【原文「これに対して意味的な観点では、」→安部読み換え「そのような、いくつかの下位区分的で】中間的なカテゴリーをいくつもたてることができ、ちいさな語彙体系（その最小のものは二つの単語からなるものである）と語彙全体とのあいだに中間的な語彙体系がなりたつ。

《「語彙的カテゴリー毎の体系」とその総体としての語彙全体の体系》語彙の体系は一つの平面のうえにかけるようなものではない。それは意味、形、文体などいくつかの側面の総合としてあるのであり、さしあたってはそれら各側面ごとに見ていかなければならない。〔補注：安部 2009.11 では、【 】内に示した原文部分を→のように再解釈して、「語彙的カテゴリー」を再設定したものであった。〕

## 4 部分的語彙から総合的語彙へ

### 4-1 部分語彙の構造特性と語彙的カテゴリーの階層構造

先に見た「語彙体系の具体例」は、いわゆる「小さな体系」とも言われる部分的特徴であった。計量的な総合的研究やシソーラス的な総体的研究等を別とすれば、これまで語彙の体系的な研究とされてきたものには、そのようないわば部分語彙を取上げたものが多い。それゆえ、これからの課題の1つとしては、そのような小さな体系、部分語彙というものを、どのような理論のもとに組み上げて、語彙総体をとらえる研究へと構築していくか、という問題がある。

その課題を検討するためには、まず1つには、「部分語彙」というものが、語彙全体に対して、あるいは、部分語彙同士で、どのような特性をもつか、ということ、明らかにする必要がある。いわば、「部分語彙相互の関連性」の解明である。

また、一方では、語彙は、意味、形態、語種、語構成ほか全体的にはどのような諸特性をもち、それらの諸特性は相互にどのような関係を形作っているか、また、それらの諸特性のさらに下位構造はどのように把握されるか、ということを知明していく必要があるように思われる。いわば、「語彙の諸特性のもつ諸相とその上位下位構造」の解明である。

前者については、安部 2010.3 で取上げたことがあるが、本稿 5 章の問題とも関連するので、結論部分のみ 4-2 に簡単に紹介しておく。後者については、安部 2009.3a の 11 ジャナルの下位的カテゴリーを安部 2010.9 で試論として提示してみた。4-3 にて 1 部修正して示してみたい。

#### 4-2 部分語彙の特性

語彙総体の特性は、一度で解明できないとすれば、部分語彙ごとにその特徴を知明していくのがよい。それは、前田富祺氏が一連のご研究で、意味分野別の部分語彙研究として主張してきた方法でもある。一方で、その部分語彙がどのような特性をもつかを検討していくことが必要になる。安部 2010.3 では、「語彙の部分的体系の特性」として、次のような性質が認められるとした。

##### 語彙の部分的体系の特性

- (0) 語彙は、音韻・文法に比べて（以下、この部分の表現は略する）、研究対象である単位が多く、その分、その部分的構成要素（部分体系）が多くなる。
- (1) 語彙の体系は、いくつかの部分体系からなる。その意味では合体型といえる。
- (2) 語彙の（部分）体系は、多面性、多元的性質をもつ。
- (3) 語彙の（部分）体系は、多層性、重層的性質をもつ。
- (4) 語彙の（部分）体系は、時に融合（複合）性をもつ。
- (5) 語彙の中の部分的語彙には、他の部分より独立性の高いものがある。

「小さな体系」「小さな語彙」を相互に組み立てて、語彙全体を把握していくためには、このような、部分語彙そのものが持つ特性がより詳しく解明される必要がある。

#### 4-3 語彙的カテゴリーの階層構造

##### ——「語彙分野別下位的カテゴリー」（試案）

語彙がもつ特徴的性質の諸相が、どのような構造をもつかを解明する必要もある。安部 2009.3 では、語彙の研究分野に投影した語彙的諸相として、11 分野＝意味・形態、語構成・語種・文法範疇、文字・文体・位相・文化、意味体系的分析方法・計量的分析方法＝を「語彙的カテゴリー」として仮に提示し、それらが語彙の中で相互に持つ構造について、図で示して解説した。

それら 11 分野の語彙的カテゴリーには、さらにそれぞれに下位的カテゴリーとして、さまざまな語彙的諸相があると把握できる。安部 2010.9 では、それらに、研究上のジャンル分類を加味して、以下のような、階層的語彙的諸相の構造を、試論として提示してみた。まだ試論の段階であり、まだ、11 分野の「語彙的カテゴリー」（理論・方法論を含む「0 語彙の総論」を追加）の下位的カテゴリー内における相互の位置付け（下位番号の順番）はいまは仮のもので未確定である。しかし、これまで諸研究で取り上げられてきたさまざまな語彙の問題が、どのような分類（語彙的カテゴリー）の中に位置づけられる問題であるかが、従来よりも、より把握されやすく、明示的になると思われる。

今後は、それぞれの下位分類内の相互の位置付けを検討するとともに、さらにそれぞれの中での下位分類についても、検討していく必要がある。その作業は、「小さな体系」や「部分語彙」というものが、語彙総体の中でどこにどのように位置付けられるかを、より明示的に把握することにも役立つと思われる。

## 形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

### 0 語彙研究の理論と方法

- 0-1 語彙の体系理論
- 0-2 語彙体系・語彙構造の事例研究
- 0-3 語彙化現象
- 0-4 語彙研究方法論

etc.

### 1 意味

- 1-1 語の意味と語彙の関係
- 1-2 成分分析・意義素分析・弁別索性分析
- 1-3 多義語と同音語
- 1-4 類義語・同義語
- 1-5 反義語
- 1-6 単義語と多義語
- 1-7 語の意味変化（意味変化の原因・意味変化の方向性・語源、ETC.）
- 1-8 擬音語・擬態語
- 1-9 名称論（固有名詞・人名・地名・命名・名称）

etc.

### 2 形態

- 2-1 語の認定・語形
- 2-2 形態素・接辞
- 2-3 単音節語・多音節語
- 2-4 語の長さ
- 2-5 拍の種類と構造
- 2-6 単語化
- 2-7 同音語・類音語

etc.

### 3 語構成

- 3-1 語の種類
- 3-2 造語法
- 3-3 単純語
- 3-4 合成語
- 3-5 複合語（複合動詞・複合形容詞～）
- 3-6 疊語

3-7 派生語

3-8 変音現象

3-9 略語・短縮・縮約

etc.

4 語種

4-1 語種分類

4-2 語種構成

4-3 和語

4-4 漢語———①渡来漢語、②和製漢語、③和語起源音読み漢語（例、火事）、④呉音漢語・漢音漢語・唐宋語漢語・慣用音漢語

4-5 外来語

4-6 外国語（原語表記語）

4-7 混種語

4-8 略記語（例、PC、3D、NPO）

etc.

5 文法機能（略）

5-1 （品詞別範疇）

5-2 連語

5-3 慣用句・特殊句（文節以上の長い表現）

etc.

6 文字

6-1 カタカナ語

6-2 ひらがな語

6-3 漢字語

6-4 アルファベット語

6-5 原語表記語

6-6 混字語

etc.

7 文体

7-1 文体論と語彙

7-2 文章語・口頭語

7-3 書き言葉・話し言葉

## 形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

7-4 尊敬語・謙讓語・丁寧語

7-5 卑罵語・罵倒語・尊大語

7-6 雅語・歌語

7-7 比喻・語感

etc.

## 8 位相

8-1 位相論と語彙

8-2 女性語・男性語

8-3 階層語・集団語・隠語

8-4 専門語・職業語

8-5 差別語

8-6 新語・流行語・若者詞

8-7 幼児語・高齢者語（老人語）

8-8 俗語・卑語

8-9 忌み詞・女房詞・武者詞・～

8-10 地域語

etc.

## 9 文化（略）

9-1 文化範疇と語彙

9-2 宗教と語彙

9-3 外国文化と語彙（対照語彙）

9-4 ことば狩り・忌み詞

9-5 駄洒落・ことばあそび

9-6 慣用句・諺・地口・決まり文句

9-7 レジャー・娯楽

etc.

## 10 意味体系的分析方法

10-1 概念体系

10-2 語の連想・連想語

10-3 シソーラス・意味分類体系

10-4 辞書・辞典

10-5 索引・検索システム

etc.

11 計量的分析方法

11-1 単位と語

11-2 異なり語数・延べ語数

11-3 語彙量調査・全数調査・抽出調査・カバー率

11-4 基本語彙・基礎語彙研究

11-5 理解語彙・使用語彙

11-6 高頻度語・低頻度語

11-7 各種の語彙量調査

etc.

5 形態と意味の対応関係の事例報告——ク活用形容詞の一傾向——

5-1 「形態と意味との対応関係」

田島氏や秋元氏があげる「語彙の体系」の典型的研究としては、形態と意味との間に密接な対応関係が認められる事例が多かった（第2章参照）。この節では、部分語彙研究の一事例として、形態の分野と意味の分野双方に関わる事例研究を紹介し、この「形態と意味の対応」のもつ一特徴を考察してみたい。

その事例は、一方では、部分語彙に見られるいわば「小さな体系」を見つけ出す研究でもあり、「部分語彙」の特徴を検討する事例にもなる。また、その部分語彙の特徴は、他の部分語彙の特徴とも関連性が見られるものである。それゆえ、それらは、「小さな部分語彙の体系」が、他の部分語彙とどのような関係を作って、より大きな部分語彙の仕組みを形成しているか、ということを考えていく上で、1つのモデルケースともなるものである。その点で、4-2の問題を検討する上での1つの材料を提供するものでもある。

さて、ここで報告するのは、古代の形容詞に認められる形態と意味の対応関係である。取り上げるのはク活用形容詞で、中でも特に基本的形態と考えられる語幹2音節で、かつ、対義語関係にある2語で1対になっ

た形容詞間に認められる特徴である。ク活用形容詞は、シク活用形容詞より古く成立したと考えられており、その点でも、より古い段階に見られる特徴と見なすことができる。

その特徴は、まず結論的に簡単にまとめると次のようなものである。

「古代のク活用形容詞のうち、語幹が2音節で、意味的により客観的内実を持つ形容詞（「数値・度数・計量」的に数値化された計測法を持つようなもの、例えば、はやし＝速度計、あつし＝温度計など）においては、その対義関係にある2つの形容詞の形態において、意味的に優位・上位と考えられる形容詞は、その語幹第1音節母音は、一方の形容詞の語幹第1音節母音よりも、開口度の大きい母音である傾向が顕著に認められる（特に、a母音である傾向が顕著である）。それは、より優位・上位（陽性）にある形容詞の方を、音声的対比上、認知上、より印象の明瞭な響きをもつ母音をもってより印象強いものとして形成させるという音声印象的特性を反映させているため、と、解釈される。」

この特徴は、実際には、最初に見出した「小さな部分語彙の体系」であるところの「温度感覚形容詞4語」の構造をもとに、それに類似する「小さな部分語彙」として見出した色彩語彙4語、さらに、味覚語彙形容詞4語の中で見出したものであった。その3組（温度、色彩、味覚）の基本形容詞4語には、共通した類型が見出せることになる。さらに、その3組の中で新たに確認された、後述するような形態と意味との特徴から類推して、他の同様の条件をもつ基礎的形容詞にも、同じような傾向が指摘し得ることを推定することで見出したものである。

そこには、4語からなる3組の基本形容詞に並行するようにして、2語のペアからなる基本対義形容詞語彙という「部分語彙」が、いくつも併列的に同じ構造をもって存在し、それら全体が1つの統一的共通構造をもつ、より大きな「部分語彙」を形成して存在していることが明らかになってくる。そこでは複数の「部分語彙」相互のあり方を知ることができる。次節以下、その傾向を見出すきっかけになった五感感覚を形容する基礎的形容

詞語彙の特徴から、具体的に解説していくことにしたい。

## 5-2 基礎形容詞語彙における四語基本構造——色彩語彙・温度形容詞語彙・味覚語彙の形態の特徴——

五感感覚を表す形容詞のうち、温度感覚形容詞は、古代においてアツシ・サムシ・ヌルシ・スズシの四語からなり、そこには形態と意味との関係において、十字分類的な特徴的対応関係が認められる（図1参照、安部1985）。

そこに認められる「形態と意味との密接な関係」は、すでに先行研究において指摘され、よく知られている古代の色彩語彙アカシ・アヲシ・シロシ・クロシの四語（形態については柴田武1965の指摘がある）と、類似する特徴を持っていることが見出せた。視覚表現の1つ色彩語彙は、よく知られているように、古代において白・黒・赤・青（および形容詞アカシ・アヲシ・シロシ・クロシ）の四語において、意味的形態的に密接な対応関係を持っている。柴田武は、形態的な対応として、シロクロにおける～ロの他、アヲ～アカにおける第1音節のア母音を指摘している（図1参照）。

触覚にあたる温度感覚語彙と視覚の色彩語彙に類型があることから、さらに、同じく五感感覚のうち、味覚表現についても同様の傾向が予想されたので検討してみた。すると、日本語の味覚形容詞は、古くは、アマシ・カラシ・ニガシ、そして、スハシ（\*sukwa-）の四語であったと考えら

図1 「五感形容詞語彙」における四語による「2項十字分類構造」（安部2011.3）

第1母音	意味機能	視覚（色彩語彙）	触覚（温度感覚語彙）	味覚（味覚語彙）
広母音 a	陽（強）	aka—awo	atu（熱暑）—samu（寒）	ama（甘）—kara（辛塩）
狭母音 i/u	陰（弱）	siro—kuro	nuru（温）—suzu（涼）	supa（酸）—niga（苦）
語彙体系の特徴 ①語幹2音節 ②第1母音と意味的強弱の関連性：「意味的優性=a母音」⇔「意味的非優性=i/u母音」の対立 ③意味的形態的「語彙の階層性」④優性語形がより基礎的古語				

[3つの基礎語彙に同じ構造がある。二音節四語の対比的母音構造が基本構造の1パターンと見なし得る]

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

れた（安部 2007.3b、およびその増補改編版安部 2011.3 参照）。これら 3 組の形容詞語彙に類型があることが指摘できた。

さらに、これら 3 組の形容詞語彙における形態と意味との関係を検討していくと、そこには、次のような興味深い共通点が認められた。これら 3 組の 2 音節形容詞 4 語には、語幹 2 音節という共通性のほかに、母音の構造と機能においても共通性が指摘できる。それは、3 つの基礎語彙を母音の特徴と意味との関係に着目して整理すると、下図のようになる点である。意味的により強い語、より度合いの強さを表すとみなし得る語彙（表の上部）では、重要度の高い第 1 音節（頭音法則が働く等）の母音に、開口度が大きく聞こえの大きい（つまり印象の強い）ア母音が現れ、意味的に補助的非優位語彙では対極的な狭いイ・ウの母音が使われているという共通性が例外なく認められる。単なる偶然というよりも、一定の共通性をもつ現象と解釈できる。

この母音特徴は、一見単なる偶然のようにも見えるかもしれない。また、思いつく一般的形容詞に照らし合わせても、第 1 母音がア母音であるものに、何らかの特徴的傾向は見出しがたいように思われる。しかし、五感感覚を表す極めて基礎的なこれらの 3 組の形容詞語彙にかなり明瞭に認められるこの特徴が、単なる偶然と見るには整い過ぎており、より厳密にそれらが成立している条件を見直してみる必要があると思われた。

### 5-3 ク活用語幹 2 音節対義語形容詞ペアの形態と意味

改めて、この 3 組 12 語の共通性として認められる条件をより厳密に限定的に把握し、その条件にあう形容詞を対象にして再度検討してみると、ほぼ同様の傾向が新たに指摘できる。

以下具体的に詳しく解説する。まず、その限定的条件とは次のものである。

- ①色彩、温度などに認められるように、その測定や計測に物理的客観的基準があるもの。つまり、より客観的形容詞（主に、より客観的意味

を担っていたと解釈されているク活用形容詞)に限定して検討する(味覚の感覚も、個人差はある一方、生理学的化学的反應として解明されているものである)。

- ②意味的に対義関係のある1対の形容詞間に限定して検討する。
- ③原則として語幹は2音節で、かつ、対義関係にある双方が語幹2音節である場合に限定して検討する。
- ④意味的に、主観的な用法での対義語は、対象外とする。
- ⑤原則として古代語を対象とし、語形や意味・用法が、中古後半・中世以降のもので、比較的新しいものは、対象外とする。
- ⑥意味的な「優位・上位」は規則として次のように解釈する。対義関係の概念をまとめて表す場合に、現代語においては、総称として使われる名詞化語形(接尾辞「〜さ」による)になる方の形容詞を、より広義の上位概念を担う語として「優位・上位」と見なす(優劣・上下よりも母音を視野に入れると、「陽性—陰性」の方が適当か)。例えば、「あつし—うすし」では、「あつさ(=厚味)が有る/無い」(×「うすさ(×薄味)が〜)となり、「あつし」の方が上位の基準語として使われていると解釈される。

これらの条件を付けて、改めて、古代語を中心としたク活用形容詞の対義語を一覧にしてみたのが、表1である。そこでは、1組の例外(「ふとし—ほそし」)を除いて、上記の3組に認められた特徴——第1母音はアないし一方の語よりも開口度の大きな母音——が明らかに認められる(開口度の広狭は、仮にa、o対u、e、iとに2分類した)。

表1のNo. 1~10の10対は、この語幹第1音節の傾向に一致している(しかも、そのうち9対はa母音である。優劣関係が異なる「11 深淺」「12 遠」を加えると12対義語となる)。語幹の長さ、母音差がないもの、意味的問題(主観的かどうか)、時代などの点で該当しないものを除くと、例外は、「ふとし—ほそし」の1対だけである。これは、基本形容詞に認められる「形態と意味との対応関係」に認められる形態的特徴ということ

表 1 基礎形容詞 一ク活用 2 音節語幹対義形容詞の形態対応

NO	対義関係	可計測評価 (計・度・性)	陽性・優性	形態	母音	陰性・劣性	形態	母音	備考 (甲乙のあるものは乙を下線と斜体で表記)
1	明暗	光度計	明赤し	aka-	A-a	暗し	kura-	u-a	No.1~5 が五感感覚の基本語彙
2	温熱	温度計	暑熱し	atu-	A-u	温し	nuru-	u-u	
3	寒涼	温度計	寒し	samu-	A-u	涼し	suzu-	u-u	「涼し」シク活用
4	甘苦	糖度計	甘し	ama-	A-a	苦し	niga-	i-a	
5	辛酸	(辛み度)	辛し	kara-	A-a	すはし (酸) *	suka-	u-a	* スイの古形=安部 2007・2010 参照
6	遅速	速度計	早し	haya-	A-a	遅し	oso-	<u>o-o</u>	「とし (疾)」
7	老若	年齢	若し	waka-	A-a	古し	huru-	u-u	「あらたし (新)」3 音節
8	硬軟	硬度計	硬し	kata-	A-a	緩し	yuru-	u-u	「やはし」は下部参照
9	厚薄	厚度計	厚し	atu-	A-u	薄し	usu-	u-u	
10	遠近	距離計	遠し	toho-	<u>O-o</u>	近し	tika-	i-a	

a 母音であるが、母音と意味との対応 (優劣関係) が現代語とは反対に見える対義語 (「浅し」「軽し」がア母音)									
11	深淺	深度計	浅し	asa-	A-a	深し	huka-	u-a	感情の浅い・深いは主観的
12	軽重	重量計	軽し	karu-	A-u	重し	omo-	<u>o-o</u>	

母音が同じ a で差が見られない対義語					* 客観的 ※ 主観的 二母音差なし ≠ 不对応 (形態・品詞・年代等)				
1	柔軟二*	弾性・柔軟性・硬度	固し	kata-	A-a	柔し	yawa-	A-a	「こわし (硬)」
2	難易二※	難易度	難(かた)し	taka-	A-a	易し	yasu-	A-u	「むづかし」は古くは意味的に対応せず。
3	高安二※	価格	高し	taka-	A-a	安し	yasu-	A-u	金銭評価としては後代

形態・品詞・時代の上で不对応であるが、母音に差がある対義語。≠ 不对応 (形態・品詞・年代等)									
1	粗密 ≠	密度	荒し	ara-	A-a	細まかし (シク)	koma-	o-a	「こまかーなり」。中世「こまし」
2	高低 ≠	高度計	高し	taka-	A-a	ひき (低)ーなり	hiki-	i-i	「ひきし」は中世以降、「ひきーなり」。
3	長短 ≠	距離計	長し	naga-	A-a	短し	mizika-	i-i-a	形態は 2 音節—3 音節。

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

4	濃淡≠	濃度	濃し	ko-	o	薄し	usu-	u-u	2音節-3音節。「淡し」「浅し」でも同じ。
5	多寡≠	度数	多し	oho-	o-o	少なし	sukuna-	u-u-a	形態は2音節-3音節。
6	大小≠	体積	(おほき-なり)	ohoki-	o-o-i	ちひさし	tihisa-	i-i-a	品詞不对応。「おほき-なり」>「大きし」は中世以降。

◆母音の傾向が当てはまらない対義語

1	太細	断面積	太し	huto-	u-o	細し	hosu-	o-o	
---	----	-----	----	-------	-----	----	-------	-----	--

母音差がなく、形態・品詞・時代等も不对応 \*客観的 ※主観的 二母音差なし ≠不对応の対義語 (形態・品詞・年代等)

1	広狭二*	面積	広し	hiro-	i-o	せばし	seba-	e-a	母音の差なし。>中世「せまし」。
2	静騒二≠	騒音計	静けし	sizuke-	i-u-e	うるさし	uruse-	u-u-a	共に3音節語幹

主観的意味の強いもの					※主観的				
1	善悪※		よし	yo-	o	あし	asi-	A-	主観的。語幹1音節ベア。「わろし-よろし」は派生語。「いし」(巧優)シク活
2	善悪※		よろし	yoro-	o-o	わろし	waro-	A-o	主観的。「わし-よし」からの派生語。
3	強弱※		強し	tuyo-	u-o	弱し	yowa-	o-a	主観的(強度計は硬さ)。

参考 その他の対義語（シク活用との対義語）

1	美醜≠	主観的	うつくし(シク)			みにくし			「うつくし」シク活、「見憎し」複合語
2	難易≠	主観的	難かし(シク)			やさし(シク)			「むつかし」は古くは意味的に異なる。
3	美味不味≠	主観的	いし(>おいし)(シク)			まづし(まづい)			「いし」シク活、「まづし」近世。
4	芳臭≠	主観的	芳はし(シク)			臭し			「かぐはし(香詳)」複合語

対義関係の語を見出していく活用形容詞

- 1音節 うし
- 2音節 うとし、えらし、おそし、かゆし、くどし、くぼし、しげし、しるし、たけし、つらし、にくし、にぶし、ねたし、はゆし、まるし、まろし、のろし、
- 3音節 あやふし、うるさし、かしこし、こちたし、たふとし、つたなし、ひらたし、めでたし、らうたし、
- 4音節 いとけなし、むくつけし、

ができれば。

対応条件に合わない対義関係の形容詞については、表1の下方にも記しておいたが、以下に簡単に記しておく。

ア 形態的差異を持たない対義語（語幹第1母音に、広狭の差がみられない対義語）

「かたしーやはし」「かたしーやすし」「ひろしーせまし」

イ 形態・時代などの点で条件に合わない対義語

○語幹が1音節——「よしーあし」

○語幹の音節数が同じでない（他方が2音節でない）——「こしーうすし（あはし）」「ながしーみじかし」

○意味的に主観的評価語である——「よしーあし」「つよしーよわし」

○品詞・時代などが異なる——「おほき（なり）——ちひさし」（「おほきし」は中世以降）、「（価格）たかしーやすし（安）」（金銭的評価語としては後代のもの）、「たかしーひくし」は該当事例

これらからみて、五感感覚の基礎語彙3組に見られた形態と意味との対応関係は、他の基礎的形容詞の対義語においても、比較的明瞭な傾向として認められることが明らかになった。基礎的形容詞の構造に、このような「形態と意味との密接な対応関係」があることが新たに指摘できた。

改めてその傾向と特徴をまとめて記すと次のようになる。

古代のク活用形容詞のうち、語幹が2音節で、意味的に客観的内実を持つ形容詞（「数値・度数・計量」的に数値化された計測法を持つようなもの）においては、その対義関係にある2つの形容詞の形態において、意味的に優位・上位と考えられる一方の形容詞には、その語幹第1音節母音は、他方の形容詞の語幹第1音節母音よりも、開口度の大きい母音である傾向が顕著に認められる（特に、ア母音である傾向が顕著である）。それは、より優位・上位にある形容詞の方を、音声的対比上、認知上、より印象の明瞭な響きをもつ母音をもってより印

象強いものとして形成させるという形態的效果が反映されたためである、と、解釈される。

#### 5-4 部分語彙の多元性・重層性

先に、図1で、温度感覚、色彩、味覚における4語による3組の形容詞語彙を見た。それぞれの1つ1つが、1つの特有の構造を持っていた。また、3組の間には、共通した類型が認められ、3組全体としても五感語彙として対照的で併列的な構造をなしていた。相互に影響し支え合っているようでもあった。

さらに、それら3組の十字構造とは別の、五感とは異なる客観的意味領域（ク活用）という別の意味領域に、今度は2語による対義構造をなすペアの形容詞がいくつも併存していた。しかも、それらの形態的特徴は、4語単位の3組の形容詞の形態構造とも、類型性を持っているものであった。比喩的に言えば、あたかも、基本構造の3組4語の十字構造の外側に、それとの類似性を維持した、小さい部分構造の2語対義ペア7組がサテライト（衛生）的に形成され、併置されているようであった。

形態的対応は、それら3組の語彙を、重力の強い中心としての“恒星”に喩えれば、7組の語彙の“惑星”までは、“形態統御力”とでも言えるような一定の強い形態上の引力で関係付けられているように見える。しかし、「形態統御力」は、どうもそこまでしか及んでいないようであった。

しかし一方、対義関係という弱い方の“引力”は、さらにその外側までも力を持っていて、形態上の類型的優劣差は維持していないものの、客観的意義での対義関係を保持する対義ペア——「ひろし—せまし」「ふとし—ほそし」など——や、対義関係でも、情緒的で意味の基準が曖昧になる主観的対義語——「よし—あし」「つよし—よわし」など——が、なお、「対義」という点では明確な意味的対を形成したまま、“対義的引力空間”の中では共存しているようであった。

それら以外のク活用でも、意味的に新語のもの、品詞という文法機能が

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

異なるもの、後代の成立の長い形態のもの、明確な対義語が（古くは）ないもの（「きつし」等）、というものは、さらに、それらの周囲を遠巻きに廻遊している“彗星”のようなもの、とでも表現できるかもしれない。

これら全体には、先に4で見たように、部分語彙の多面性、多層性や、他からの独立性の強弱の度合いの差、などが、現れているように思われるのである。本節5—4では、やや比喩的抽象的表現になったが、5で取り上げたク活用対義形容詞の構造にも、4で述べた部分語彙の特性を投影されていることを説明してみた。

## 6 むすびとして

本稿では、日本語の語彙研究における近時の研究や学界展望を見ながら、語彙の体系に対する、狭義ではあるが基本的共通理解の様相を確認しつつ、語彙全体と部分的語彙のあり方に関する問題を検討した。それには、部分語彙の特性の研究が必要であること、また、個々の部分語彙がどのように語彙全体を構成しているのかを把握するため、研究視点自体を、より細部の上位下位の概念構成にまでわたって体系付ける必要があることを改めて述べて、その考え方の1例を試論として提示した。また、語彙に関する具体的研究事例としては、「形態と意味の対応関係」に関する部分語彙の分析を行い、対義形容詞のある種の頭音法則的なその特徴を検討してみた。

なお、第5章で提示した形態に関する解釈を、形態と意味との間の1つの傾向と位置付けるか、単なる偶然の所産と見るかの最終的判定は、今後、第1音節母音の対比的現象や頭音法則的現象を広く収集し、他言語までも含めた言語学的観点からの解釈も含めて、再検討してからということになろう。ただ、かつての音韻相通、巷の“言霊”的語源説との相違点があるとすれば、対象語彙に一定の条件を課している点と、段階的相違があるものを含め検討すべき対象事例を数的に示した点（表1）にあると言えようか。

本稿は、安部 2009.11a の理論的考察で触れ残した問題を取り上げたものであり、その続編の安部 2010.3 に続くものになる。それらも合わせて比較参照いただければ幸いである。今回触れ残した課題は、また別の機会に取り上げたい。

【参考文献】抄録（安部 2009.11a, 2009.11b、安部 2010.3 の参考文献をご参照いただければ幸いです。）

秋元美晴 2002 『よくわかる語彙』アルク出版（明記されているように、田中章夫（1978）と玉村文郎氏執筆の国立国語研究所（1984・1985）とを、概説書という立場で多く踏まえているものである）

安部清哉（1985）「国語語彙論の方法について」『文芸研究』110

安部清哉（1990）「語彙（史的研究）——特集—昭和 63 年・平成元年における国語学界の展望」『國語學』161、国語学会

安部清哉（2003）「記述と仮説と実証と理論との相互作用的発展——主に語彙史研究の視点から——（シンポジウム要旨）」『国語学』215。より詳細は、『国語学会 2003 年度春季大会予稿集』大阪女子大学

安部清哉（2007）「味覚形容詞語彙の歴史と日本語基礎形容詞語彙の類型的構造——スシ・スカシの語源の再検討から——」『日本語史の理論的・実証的基盤の再構築』（平成 16—18 年度科研費研究成果報告書：代表・金水敏編）、pp. 15-28, 私家版

安部清哉（2009.11a）「第 1 章 語彙史研究と語彙的カテゴリー——その多様性と体系化——」安部清哉編『シリーズ日本語史 2 語彙史』岩波書店

安部清哉（2009.11b）「第 3 章 意味から見た語彙史」安部清哉編『シリーズ日本語史 2 語彙史』安部共編・共著

安部清哉（2010.3）「語彙の諸特性と語彙史研究の課題——「部分語彙」「反現象」「反作用」「中和」——」『人文』8（学習院大学人文科学研究所）

安部清哉（2011.3）「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立——「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源（中国語「酢」）の再検討——」『人文』9（学習院大学人文科学研究所）

泉井久之助（1935）「語彙の研究」『国語科学講座Ⅲ』明治書院

国立国語研究所（1984・1985）『語彙の研究と教育（上・下）（日本語教育指導参考書 12・13）』（玉村文郎執筆）大蔵省印刷局

斎藤倫明編（2002）『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』朝倉書店

柴田武（1965）「言語における意味の体系と構造」『科学基礎論研究』26

形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相（安部）

- 田島毓堂（1999）『比較語彙研究序説』笠間書院  
田島毓堂（2004）『語彙研究の課題』和泉書院  
田中章夫（1978）『国語語彙論』明治書院  
玉村文郎編（1989・1990）『講座日本語と日本語教育 第6巻・第7巻 日本語の語彙・意味（上・下）』明治書院  
前田富祺（1985）『国語語彙史研究』明治書院  
前田富祺（1995）「日本語の歴史 語彙」『言語学大辞典』p. 1647 三省堂における語種の変遷  
前田富祺（2002）「第11章 語彙史」『朝倉日本語講座4 語彙・意味』朝倉書店  
宮島達夫（1967）「現代語いの形成」『ことばの研究』（国立国語研究所論集3）秀英出版  
宮島達夫（1977）「第1章 語彙の体系」大野晋・柴田武編（1977）『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店  
宮島達夫（1997）「雑誌九十種表記表の統計」『日本語科学』1、雑誌九十種の最終的語彙数と統計が掲載されている。  
宮島達夫（2005）『語彙論研究』むぎ書房（宮島達夫（1977）を収める）  
宮島達夫（2007）「語彙調査からコーパスへ」『日本語科学』22、雑誌九十種と雑誌70誌の比較、雑誌九十種の語数に関する注意が記されている。  
宮島達夫（2009）「語彙史の比較（1）——日本語（雑誌90種と雑誌70誌）」『京都橘大学研究紀要』35  
森岡健二ほか編（1982）『講座日本語学4 語彙史』明治書院

【付記】本稿は、前半の第1章～第4章の理論的課題の部分に、次の演題での講演内容を含み、第5章については、下記の口頭発表の内容を含む。それぞれにおいて御質問御意見を下さった参加者の方々に感謝申し上げる。

- 安部清哉「マクロの語彙（史）研究とミクロの語彙（史）研究をつなぐために」、2010年語彙研究会大会（第8回大会）講演会、2010年9月4日（土）13:00より、於・愛知学院大学 楠元キャンパス本部会議室。  
安部清哉「ク活用2音節対義形容詞の形態上の一傾向（小報告）」、青葉のことばの会第171回研究会、2010年11月20日（土）、於・二松学舎大学丸段1号館602教室。

（日本語日本文学科 教授）